

# 母から聞いた

## 井上秀

上

柏原町出身 徳田八郎衛

筆者の徳田八郎衛はつろうゑさんは昭和13年生まれで、柏原町母坪出身。元防衛大学教授。母親の博士さんはつらうゑは山南町小新屋の出身で、明治36年の生まれ。大正13年、日本女子大学校を卒業。旧姓は横尾。父親の富一さんは明治24年、柏原町母坪の生まれ。井上秀は明治8年、春日町山田の生まれ。明治34年に開学した日本女子大学校に入学。昭和6年、同大学校の4代目校長に就任。

卒業後6年目の秋、高平成になると郷友の集まの校のクラスで春日町のHで尋ねても、若い世代に脇役で登場したので知る感がある。秀の薫陶を

君が開口一番「井上秀さんのほとんどは知らないられるようになったと受けた母、徳田(横尾)博士」  
と郷里の偉大な先輩 同名の女性の陰になって えるものは少なく、同じを、この機会に郷里の読

の死を悼んだが、我が年代でも井上秀(1875-1963)を知る者 傾ける解説が次々とネットは少なかつた。いわんやトに現れる。聴いてみる

## 農繁期に託児所開設

部長を戦時中に務めたという理由で公職追放を受け新井国民学校校長を解職された広瀬巖先生が教職に復帰できないのが不満であった。終戦の年、私たちの入学を迎え、翌春には校長自ら我々2年女子教育に捧げてきたの恩師であるが、話してみると母にとつて同様の恩師が秀であった。1931年から46年11月まで日本女子大学校の校長を16年も務めた著名な女性教育者だが、24年卒業生の母にとつて、秀は雲の上の校長ではなく、親しく教えを受けた家政学の教授・学部長であり、寮監であり、同校の第1期卒業生、かつ郷里の大先輩でもあった。卒業後同窓会「桜楓会」身や「文芸春秋社」社長の菊池寛なども受けてに從う母であった。

ために毎週発行される機「要職」にあったという理由だけで。そして広瀬校長も井上校長も、解除となつても復帰できなかった。日英開戦寸前に子供を連れ、父を残してシंगा



徳田博士さんが残した日本女子大学校1924年卒業時のアルバムに載っている井上秀



筆者の母親、徳田博士さん。日本女子大学校在学時の20歳のときの写真

たのは私が中学生の時、校長を16年も務めた著名な女性教育者だが、24年卒業生の母にとつて、秀は雲の上の校長ではなく、親しく教えを受けた家政学の教授・学部長であり、寮監であり、同校の第1期卒業生、かつ郷里の大先輩でもあった。卒業後同窓会「桜楓会」身や「文芸春秋社」社長の菊池寛なども受けてに從う母であった。

調べてみると前年夏の「家庭週報」に、農繁期に託児所と共同炊事を農村に普及させよとの会長ア

# 母から聞いた

# 井上秀

中

柏原町出身 徳田八郎衛

筆者の徳田八郎衛はちろうゑさんは昭和13年生まれで、柏原町母坪出身。元防衛大学教授。母親の博子さんは山南町小新屋の出身で、明治36年の生まれ。大正13年、日本女子大学校を卒業。旧姓は横尾。父親の富二さんは明治24年、柏原町母坪の生まれ。井上秀は明治8年、春日町山田の生まれ。明治34年に開学した日本女子大学校に入学。昭和6年、同大学校の4代目校長に就任。

リケジョを輩出した先輩方の知遇を得たが、「多くの女子学生が」

次井上秀について母陸軍兵器本部や海軍技術研究所に勤労働員されていた中で、日本女子大の

生理衛生だけでなく、化学が理科に強いのに感心した」と述べる企業の

家政学部では化学の講義（英文科と国文科）も桜楓会支部会合では母校

生には女学校の家庭科教員ケジョ」と思われたのも無理はない。職務上の研

高女の教諭となるが担当大には珍しい理学部も今。広まったエピソ

は理科と修身だった。後には特殊なリーダーの分子機能、生理分子機能場を見出した井上夫妻は

開発に携わる私は、戦時を究明する構造物性部門曹洞宗総本山総持寺に墓

中、リーダー開発に挑んだ活躍は「理系」家政学を求めたが、余りにも早

過ぎたので場所を忘れてしまった。そこで同寺と

われ、恥ずかしながら、教えた。京都第一高女を

親しい卒業生の母堂に伴に取り組んでいたことも

卒業し専攻科へ進んだ時

期だ。また生活のため特

急請け負ったという。これ

後に日本女子大や付属

この二元女学校での和裁教育に役

立つのである。

また卒業式後の謝恩会

重みがあった。

## 「妻は猿回し、夫は猿」



筆者の母親、博子さんが日本女子大学校4年生のとき、軽井沢で校外活動をしたときの集合写真

を預けて米国留学へ

私の祖母の妹の一人は、妻は米国コロンビア神楽村稲土の足立家へ嫁大学留学なので支那は船にいて。また20歳の秀城村で育ったのだ」と教

論法は目新しいものではなく、すべての賢夫人は迎えた18歳の足立雅二も後に代議士や女子大学

実行しているが、秀のよ同じ株内なのを知り、父校長となるカッパルであるが、結婚当時から郷里

の「いとこ会」で大勢の「父のいとこ」から秀でもその「異色の生き雅二について聴取した」方」が注目を浴びていた

小学校入学の長女とがある。「もう明治なことを知った。

のに10代で結婚？」と聞くと「伝記にはそう記されているけど、入籍しただけだよ。大陸に懂れる雅二は、それから中国語を学び、陸軍通訳として台湾で活躍してから東京専門学校（今の早大）へ進み、卒業の年（1899年）に簡単な式を挙げている。その年に長女支那が誕生するが、翌年、夫は東亜同文会を創設して上海へ飛び、翌翌年（1901年）、妻は開学した日本女子大へ入学だから育児は大変だったようだ。小学校入学の頃

# 母から聞いた

# 井上秀

下

柏原町出身 徳田八郎衛

筆者の徳田八郎衛はちろうゑさんは昭和13年生まれて、柏原町母坪出身。元防衛大学校教授。母親の博子さんは山南町小新屋の出身で、明治36年の生まれ。大正13年、日本女子大学校を卒業。旧姓は横尾。父親の宣一さんは明治24年、柏原町母坪の生まれ。井上秀は明治8年、春日町山田の生まれ。明治34年に開学した日本女子大学校に入学。昭和6年、同大学校の4代目校長に就任。

学生時代から期待会「幹事長に任じられ、立以来の後援者である西さらにコロンビア大学家園寺侯爵、大熊伯爵、沢

秀の受けた優遇は過刺政学部へ入学して欧米の澤男爵などに謁を賜るではないか?と率直に母家政学動向を研究する機が、その中に秀の姿も

に聞いたことがある。そに会を与えられる。2年後ここで知ったのは、周囲のに帰国するや35歳の若さ学生より10歳近く年長で教授、かつ桜楓会理事で、専攻科も終え、結長となる。初仕事は、桜

婚・出産・育児も経験し楓会での託児所(保育た秀が与える頼もしい存所)の開設であった。在感であった。「女子高 当時、明治末期は不況等教育無用論」が世間横行する中、「出産率を減少させる」「独身者を生み出す」という極論もあつた。それら妄論への無言の反証となる秀への関係者の期待は大きかつたという。29歳で卒業した秀は、付属高女教諭と発足したばかりの「桜楓

## グローバルに活躍した夫

ささらにコロンビア大学家園寺侯爵、大熊伯爵、沢

全日本の舞台で活躍し記」も上梓した。大正初

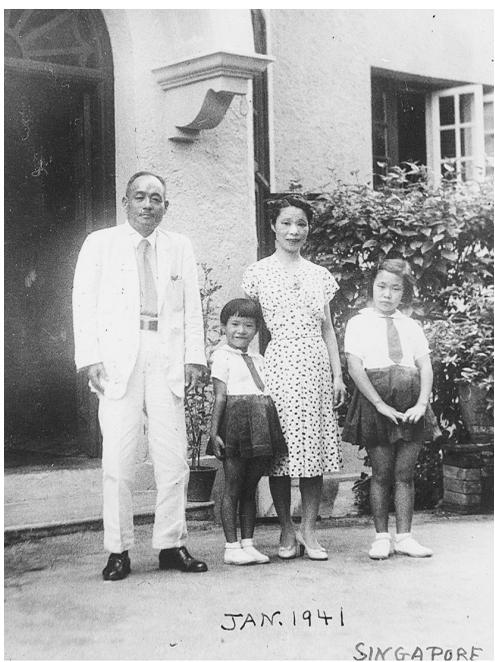
い丹波人は多いが、夫の専務理事となり、名著

「南洋」を上梓する。明治期の浪漫的南進論に代わり、大正末期に現実的南進論が興るのを先取りした活躍である。南進論は昭和期の共栄圏と混同されがちだが、説くのは経済的、人的進出であり現在の日本の姿を予言するものだ。これに關する文筆家や実業家は多

だけであり、著書は30冊の写真とは大違いだ。2情報交換は有益だったに及ぶ。最後は開拓移住歳半の私など「列外」で「変わった人だね」で

その雅二がシンガポールの徳田家で一泊する。時は、日本への米英蘭あつた。外地生活が長く恩師の夫君のご来駕といふ。表向けは商用の雅二のだから、かなり日本人

が、明らかに賓客扱い印、海南島と3カ月に及当時の日本では正しく評



1941年1月、三菱商事シンガポール支店長の父をたずね、徳田家で1泊した井上雅二。母や姉らと共に